



- ①装置を制御するシーケンサー
- ②制御盤の出荷前チェックを行う
- ③薬液の温度調整機器
- ④搬送機やポンプを駆動するマグネット
- ⑤めっき処理前(左)と処理後(右)

た な か でん き こう ぎょう
田中電機工業 株式会社



代表取締役社長
た な か よしひと
田中 義人さん



**社員を大切にする
アットホームな社風**

創業当時より、社員とその家族を大切に
する社風であり、また、何か問題が発生
したときでも、全員でバックアップする体制
をとる考えが自然と備わっています。一人
ひとりがお客様の立場になって提案し設計
開発を行っているため、納入後に「ありが
とう」と言ってくれることが多く感じます。
そのため、途中退職する社員がほとんど
いません。これからも、お客様を大切に、
社員を大切に、家族を大切にすることを
有り続けることをモットーとしていきます。

- 主な事業内容**
制御盤設計・製作、シーケンスソフト
開発、タッチパネル画面設計、生産管理
システム開発、電気工事
- 主な取引先(納入先)**
自動車部品メーカー、半導体メーカーなど

住 所 / 〒570-0012
大阪府守口市大久保町3-21-31
TEL / 06-6901-3863
FAX / 06-6904-5085
創 業 / 昭和35年2月
設 立 / 昭和40年5月
資本金 / 2,000万円
従業員 / 18名

<http://www.3863.co.jp/>

自動車部品や半導体など 幅広い分野でめっき処理制御を行う

事業内容と沿革

札幌市の開発事業所でスマホ向けの開発も進める

素材の表面を加工して耐食性や
耐久性を向上させるめっき処理。製品
の性能を高めるためには欠かせない
技術だ。めっきは自動車部品やスマート
フォン(スマホ)の電子部品、半導体
のほか、日頃使用するスプーンなどさま
ざまな場面で使われている。同社は創業
以来、めっき装置の全自動システムや、
めっき装置を制御するのに必要な制御
盤の設計・製作や、それに付随する
システム開発を行っている。

昭和61年に海外初進出国となる
ロシアで自動システムを立ち上げた。

以降、ヨーロッパ、北米、南米、東南
アジア諸国など世界各国にめっき装置の
導入実績がある。平成3年にはシステム
設計部署を設立し、生産管理システム
の開発に着手。シーケンス制御から生産
管理システムまで総合的にサポートする
体制を構築した。平成27年に札幌市
に開設した開発事業所では、生産管理
システムや社内インフラの開発のほか、
スマホやウィンドウズのパソコン上で
動くデスクトップアプリケーション(応用
ソフト)の開発も行うなど、幅広い分野
への挑戦を続けている。

強み

トレーサビリティの 需要の高まりにも対応

装置を制御するためのコンピューターにあたる
シーケンサーの制御や制御盤設計といった
電気設計部門や、電気工事部門、システム開発
部門で計16名の技術者を有している。3部門
で連携して製品開発や製造を行うため、短納期
で高品質な製品作りを可能としていることが
強みだ。同社は他社に先駆けて昭和59年に
シーケンサーでのプログラム開発にいち早く取
り組んだため、シーケンサーの能力を最大限に
引き出すことができるノウハウを蓄積している。

最新技術を取り入れて技術向上を継続
することで、高品質なシステム開発を行って
いる。加えて、補修・修理にも迅速に対応
する。シーケンス制御などのシステムを数値化
することで、顧客からの故障メンテナンスの
問い合わせにも、担当者だけでなく同社の
技術者が誰でも対応できる体制を敷いている。
「誰が作ったシステムであっても、全社員がメン
テナンスできる」と連携力の高さを強調する。

また、ここ数年のトレーサビリティ(生産
履歴管理)の需要の高まりから、生産管理シ
ステムの導入を希望する顧客が増えていることにも
対応する。社内に電気設計者とシステム開発者
を有する強みを活かし、仕様や打合せ、導入まで
細かな調整をスムーズに行えることが強みだ。

成長戦略

技術人材を確保 新規事業にも挑戦

同社の主力である自動車業界では、
自動運転などの普及により、使用される
電子部品の大幅な増加が予想される。
また電子部品へのめっきは欠かせない
技術であり、設備投資の需要が見込まれ
ることから、「技術人材の確保が目下の
課題」と田中義人社長は話す。同社では
高校・大学・高専生のインターンシップ
の受け入れを始める計画だ。工具の使い
方や、モーターが動く仕組みなどを体験
してもらうことで、ものづくりに興味を
持ってもらうことが狙いだという。

また、ここ数年は、自社製品に搭載
したセンサーを生産設備に接続して、
工場のスマート化を進めるなど、製造現場
でのIoT(モノのインターネット)の活用
が急速に進んでいる一方で、めっき業界
は「IT化が遅れている」と田中社長は
懸念を示す。同社はIoT化にも対応した
生産管理システムの開発を進めていると
いう。ITに関する専門知識がなくても、
現場の人が便利に使用できるシステムを
構築し、故障予知などに役立つ考えだ。
業界に先駆けてシステム開発し、め
っき業界のIT化をけん引する。

今後の展開

スマホを使った 社内ツールも開発中

20代を中心とした若手社員の意識改
革に積極的に取り組んでいる。「技術力
を磨くことも大切だが、まずは仕事への
取り組み方や考え方を改善したい」と田
中社長は力を込める。その理由を「短納
期で品質の高い製品を提供するには、お
客様の要望をしっかりと聞き、信頼関係
を築くことが大切だから」と説明する。

現在、札幌の開発事業所では、スマ
ホを活用した社内ツールを開発中だ。ス
マホのアプリなどを使って、社員それ
ぞれがアプリ上でスケジュール管理を
できるようにして、仕事の進捗を「見える化」する。
各自のスケジュールや進捗状況を社員
それぞれが把握することで、業務の効率
化につなげる考えだ。

また、仕事が遅れている社員に対
しては上司が呼びかけたり相談に乗っ
たりするなど、コミュニケーションツ
ールとしての活用も想定する。若手社員
が普段使い慣れているスマホを仕事
に取り入れることで、仕事に意欲的に
取り組んでもらうことが狙いだ。社内
での連携力を強化し、若手社員もベテ
ラン社員と同じ意識レベルで仕事へ
取り組む体制を整える。